国会での雪解け問答

本屋で『雪国大全』佐藤国雄著(恒文社・本体三二〇〇円)の本が目に付いたので、購入してみた。四〇〇ページ近い大著で帯のコピーに、

「二十世紀に忘れた故郷の暮らしと風景」

「忘れられない雪国の生活と歴史を記録に残す」

とPR。

著者は一九三一年生まれの小千谷出身で、一九五九年朝日新聞社入社。編集委員などを経て現在、地方ジャーナリストとして活躍とある。

江戸時代のベストセラー鈴木牧之の『北越雪譜』の現代版といったら持ち上げ過ぎか。面白い話が載っていたので紹介する。

一九七七年三月、衆院予算委員会、質問したのは木島喜兵衛議員、答弁は当時の海部俊樹文相だった。

木島「もし、雪が解けたらどうなるという試験問題が出たら大臣はどう答えますか。」

文相「私は水になると答えると思う」

木島「一般にはそれが合格。が、わが新潟は豪雪で春を待ちわびています。雪がとけたら春になる、と答えたら、それは誤りになるのです。雪が水になるのは《理》の世界、春になるのは《情》の世界です。同じノーベル賞でも湯川さんは百点で川端さんは零点。雪国で春を待つ人はみんな×(バツ)なのです。何故、私がこういうか。今の小中学校ではテストの点数で評価し、五段階評価が行われている。個性や、どこまで理解したか文章で書く評価は必要です。だが、テストの点数だけで順位をきめ、子供を評価、序列をつけるのはどうかと思うからです。学歴社会をなくすためにも評価をやめるよう指導されませんか。」

教育の荒廃は三十年前に始まっていた?といえるかも知れない。

(編集部)